
僕の秘め事

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の秘め事

【Nコード】

N6698L

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

真面目で大人しい中学生の弟が、深夜にこっそり家を抜け出した。それに気づいた姉は、心配して親友に相談する。

さて寝ようと、森下めぐみはテレビを消して、ヘッドフォンを取ったとき、隣の部屋から物音が聞こえた。

隣はめぐみの弟の真人まことの部屋である。もうすぐ午前二時。いわゆる草木も眠る丑三つ時の真ただ中である。真人は姉のめぐみから見ても、大人しい真面目な中学生だ。てっきりもう寝ていると思っていたんだけど。

めぐみは何となく耳を澄ました。

きいっとゆっくり扉が開いた。そして静かに閉められる音。廊下の電気のスイッチを入れる音が聞こえないまま、足音を消すように階段を下りていく。トイレではないようだ。台所から飲み物を調達するつもりかしら。

ところが意外なところから音が聞こえた。玄関である。

めぐみもそっと自室を出て、暗闇の先の玄関に目を向けた。玄関で靴を履く弟の背中が見えた。パジャマではない、私服である。真人は玄関のかぎを開けると、やはりこっそりと音をたてないように家を出た。めぐみは慌てて部屋に戻り、光が外に漏れないよう注意しながら出窓のカーテンをずらし、こっそり外を見た。

自転車に乗らず徒歩で、家を離れて行く真人の姿が見えた。

その頃、平山哲郎はテレビを消して、目覚ましを設定していた。

すると突然手に持つ携帯が震えた。メールではなく通話だった。相手は森下めぐみ。高校の同級生にして幼馴染。恋人ではないが、同じ志をもつもの、すなわち同志である。

「どうした、こんな時間に？」

「ごめんね。起きているのは分かったから、電話しちゃった。相談したいことがあってね。どうしても気になって……」

彼女の口ぶりからすると、今日の感想、というわけではないようだ。

「分かった。話を聞こう」

「ありがと。実は今さっきね、弟がこっそり家を出て行ったの。どう思う？　こんな時間に無断外出なんて」

哲郎も真人とは面識があった。真面目で大人しい少年である。確かに外出するには不自然な時間だ。めぐみも同様に思っているからこそ、電話で相談しているのだろう。

ただ一見真面目そうに見える真人だが、その一方で真人には、自分と通じる何かを感じ取っていた。その点から彼の行動を理解できるかもしれない。

「コンビニに買い物に行ったのではないか？」

哲郎は、その可能性は低いだろうと思いつつもたずねた。

「ううん。家を出て右、学校や駅がない方に歩いて行ったわ。コンビニに行くなら、駅の方が近いわ」

哲郎はめぐみの家を思い浮かべた。家の前を通る道路を右には、住宅街が広がっている。何もないわけではないが、深夜は真っ暗である。さらに歩いていけば県道に出て、道沿いには郊外型のスーパーやファミレスもある。ただ24時間営業ではなく、こんな時間に店は開いていない。誰も人なんていない……

唐突に、哲郎の頭の中でひらめいた。

「そうか……そういうことか」

「え、どしたの？」

どうやら自分の見立ては正しかったようだ。さすがめぐみの肉親というべきか。

謎は……すべて解けた。

「ねえ、もしかしたら、悪い連中と付き合っているのかしら。それともいじめられていて、誰かに電話で呼び出されたとか。それともまったく逆で、実は彼女がいて、こっそり逢引とか……」

「それはないと思う。ただ、このままだと彼はひどく傷つく可能性

がある」

「えっ？」

「森下、こっそり抜け出せるか？ 今からそっちに向かう。一緒に真人くんの元に行こう」

電話の向こうで、めぐみがうなずくのが感じ取れた。

県道沿いの歩道を歩く。自動車のライトが通り過ぎるたびに、心臓がどきどきする。変に思われないだろうか、家出少年と間違えられて補導されないだろうか。いや、大丈夫。あと少し、あと少しで目的地に着く。

その距離が長い。自転車を出す際の物音を恐れて徒歩で来たのを、森下真人は少し後悔していた。

けれど歩くこと30分弱。ようやく目的地にたどりついた。そこはいわゆる複合施設だった。スーパー・本屋・ドラッグストア・衣料品店などが立ち並んでいる。だが現在は午前二時過ぎ。どの店舗も閉まって、ひっそりとしている。

真人は高鳴る胸を抑えつつ、ゆっくりと歩んだ。ところがあと少しというところで、暗闇の先に人のシルエットが現れ、真人は心臓が止まりそうになった。しかもその人物は、真人に向かって話しかけてきたのだ。

「やあ。久しぶり真人くん。中学生がこんな時間に出歩くのは感心できないね」

「……哲郎さん？」

その人は姉の同級生の、平山哲郎だった。子供のころは近所のお兄さんって感じでよく一緒に遊んだし、今も何度か自宅で顔を合して会話を交わすことはある。でもなぜ彼がこんな時間にこんな場所に？ それに、このままでは目的が果たせない。

そわそわしている様子を悟られたのだろう。哲郎が言った。

「心ここにあらずってとこだね。まあ仕方ないか。けれど、それは

叶わないんだよ。僕がここにいるからじゃない。君にとっては残酷な事実だろうけどね」

哲郎がそっと、立ち位置を変えた。

真人はいぶかしがりながらも、歩みを進めた。哲郎がいる以上、目的を果たすのは厳しいだろう。けれどせめて、一目様子を見るだけでもと、そんな気持ちで前に出た真人が、衝撃の事実を目の当たりにする。彼は愕然として、深夜なのも忘れて叫んだ。

「ないっ、なんでないんだっ！」

スーパー入り口の横。昼間なら、手押しのカートが並べてあるところの奥。そこに、あるはずのものがなくなっていた。広がるのは、ただ空虚な空間のみ。

その反応を予想していたかのように、哲郎が穏やかにつぶやく。

「君が泥棒まがいのことをしようとしていたとは思わない。正規の方法で手に入れようとしたのだろう。けれど人気のない深夜。犯罪行為がないとは限らない。だからスーパー側は、当然こうする」

透明なガラスの内側。真っ暗な店内に、ひっそりと目的のもの――ガチャガチャの台が仕舞われていた。

「そ、そんな……」

そう、真人の目的はガチャガチャだった。特にきらきらとしたプリキュアのやつが欲しかった。本屋に寄る際、目に入って興味を持ったのだが、主婦やさまざまな人がいるときに、女子供じゃあるまいし、買えるわけがない。

「誰もいないこの時間に来れば大丈夫だと思ったのにつ。僕は……僕は……どうやってしたらいいんだっ!？」

アスファルトに手をつき、今にもこぶしで殴りつけかねない様子の真人の目の前に、プリキュア（黄色）のキーホルダーが掲げられた。

「真人……」

「お姉ちゃん」

声を聞いて顔を上げると、そこになんと姉のめぐみがキーホルダー

―を持って立っていた。「これをあげるわ」

「えっ……でも、いいの……？」

戸惑う真人を前に、めぐみはどこか遠くを見るような、まるで予言者のように言った。

「今度、秋葉原に来なさい。あそこは魂の解放区。だれでも気兼ねなく欲しいものを買うことができる、魅惑の聖地なのよ」

――姉が、神々しく見えた。

「帰ろうっか」

めぐみに促されて、真人は立ち上がった。帰り際、どうしてもここが分かったのかと哲郎に尋ねると、自分も似たような経験をしたからだと言われた。哲郎と同じ行動をした自分がどこか誇らしく感じた。

「そう言えば、どうしてこんな時間まで起きていたの？」

真人は、自転車を押しながら前を歩く二人にどちらともなく尋ねる。真人としては誰にも気づかれないよう、終電時刻からさらに少しずらした時間に決行したのだが。

二人は顔を見合わせると、真人に振り返って、暗闇でもはっきり分かるほどの笑顔を見せた。

「そんなの決まってるじゃない」

「ああ、生徒会長はメイドっ子（深夜アニメ）を見ていたからさ」

その笑顔を真人はまぶしそうに見つめていた。

（後書き）

今回のテーマは、真面目と見せかけて実はくだらない話を書く、でした。

プリキュアと会長はメイド様は見えていませんが名前だけお借りしました。

ちなみに私自身は、哲郎と真人の中間くらいの人間です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6698/>

僕の秘め事

2010年10月8日14時51分発行